

チャイムのない学校

--五日市南中学校区内--



第54号平成24年 1月20日
広島市立五日市南中学校
〒731-5135 佐伯区海老園 4-2-21
TEL082-923-5601 FAX082-923-9828

校長室だより

落語は、人間の業（弱さや醜さ）を

肯定する表現そのものである。立川談志（75才）

～1月6日（金）授業開始式～

おはようございます。私は、遠い昔、学生時代に東京の一角のビルで落語を聞いたことがあります。友達と聴いた落語の世界は、味わい深く今も心に残っています。

確か、橘家円蔵だったような当時の落語会の名人だったようなそんな記憶があります。

もう名人の名前も自信がなく、落語のお題名も自信がないのですが、ただ暖かく深い落語の世界が、今も心の奥底まで染み込んでいます。

昨年暮れに、立川談志が亡くなり、彼が晩年どのように生きていたかその生き様を密着したドキュメント番組がありました。

家で横になり、昔感じていた立川談志のイメージと今あらためて見る立川談志の生き様の違いに驚きを持ってテレビを見ていました。その時に印象に残った言葉や場面を綴ってみます。

「高いものを買うやつに、ろくなやつは、いない。車は高いから、電車やバスをいつも使う。そしていい本を買う。そこから古典落語と現代落語を愛し、創り上げていった。」

「爆笑問題の太田光が、立川談志の落語を聞きに来ていました。太田光はとても緊張し、真剣な表情で『落語、おもしろかったです。』と言っていました。太田光をはじめ立川談志のまわりには、『笑い』を真摯（しんし）に『生きることから学び取っている』人たちがばかりが集まっていた。」

「立川談志が大切にしていたことは、『書くこと』と『落語とは、人間の業（弱さや醜さ）を肯定する表現そのもの』である。」

「若い頃には国会議員をやったこともある。やってみないとその本質はわからないと立川談志。」

歩み	第27号 ★ 12月号★ 生徒会執行部
----	---------------------------

みなさん、こんにちは！
もうすぐ冬休みですね。寒さが増してきましたが、風邪を引かないよう気をつけましょう。
さて、今月で藤田会長率いる生徒会執行部は任期を終え、新しい生徒会執行部が引継ぎます。そこで今回の歩みでは執行部に一番の思い出を聞いてみました！

わたしの1番の思い出



目立たない所にも、皆の協力があります

生徒会長の 藤田 希海 君

私の一番の思い出は「メモリアル
スポーツ大会。旧五日市南球場の
土を掘り、新中日三球場に移り
来た。そこに松花壇、横や直へ
メモリアルスポーツ大会の作り出し、
その後の生徒会活動に携わって
来たメモリアルスポーツ大会
私の思い出はこれです！
お返しに私も頑張りたいです。
1年間 皆に ありがとうです。

「立川談志は、落語の最中に怒った。あるお寺の御堂で、立川談志が落語

をしている様子をテレビに撮っていた。

落語も盛り上がり、見事に観客と一体に

なっていたある場面、立川談志が、

お客さんに向けて

『そんなにおもしろいですか。

笑うところですか。』

という。お客さんは、何も思わず

笑っている。その場面も目立たないくらい

落語は盛り上がり

お客さんは満足し終演となった。

一人立川談志は、楽屋で終演後も

落ち込んでいた。

切ない場面に笑いが起こった。

落語の登場人物がつらく切ない場面で

笑いが起こった。

人がつらく切ない時、笑ってしまう人が

許せなかった。お客さんが許せなかった。

そんな今の時代では、
『すみませんも』『共感も』『協力も』なくなってしまう。それでは、落語のテーマも無くなってしまう。『落語とは、人間の業（弱さや醜さ）を肯定する表現そのもの』である。立川談志は迷いながらも、落語に戻っていく。古典落語に談志流のアレンジを加えていく。『芝浜（しばはま）』が立川談志の十八番（おはこ）である。」

3年1組 学級委員・・・重谷 健太（しげたに けんた）

松浦 百合加（まつうら ゆりか）

生活委員・・・西田 覚（にしだ さとる）

益田 優花（ますだ ゆうか）

保健委員・・・大熊 誠司（おおぐま せいじ）

有村 梨穂子（ありむら りほこ）

図書委員・・・寺戸 慎（てらと しん）

別所 莉緒（べっしょ りお）

以上18クラス144名の生徒会役員を認証します。

「立川志の輔は、NHKのためしてガッテンなどによく出ていますが、立川談志門下の一番弟子です。その彼の談志師匠に対するコメントは次の通りです。『古典+談志の人生は、取っ組み合い。』

「歌舞伎で有名な中村勘三郎の立川談志評は次の通りです。

『古典の型だけ話したり教えたりでは飽き足りない人、そして彼の落語には、業（ごう）の裏張り（うらばり）がしてある。』

談志は落語以外にぶつかるものがなかった。落語が生きる目的だった。

談志は次のような格言を持っている。

『銭湯（せんとう・・・昔の公衆浴場）は裏切らない。』

この格言の中に、『落語とは、人間の業（弱さや醜さ）を肯定する表現そのもの』が入っている気がする。ゆっくりと考えてみてください。

談志は、落語の中に生きる意味を求めた。太田光は、談志を天才と呼ぶが『基本を突き詰めていった人』だ。古典をすべて覚え、そこに落語は一期一会、いつか最高の落語ができると突き詰めていっていた。

最後に、もう一つの談志の格言『幸せの規準がないやつって、いやだな。』

これは談志独特の言い方で『幸せの規準を自分の中で持つことが、いる時代だよ。その中で、世の中のみんなの幸せの規準を一緒に創っていこう。』そして、その規準の中に『すみませんも』『共感も』『協力も』いるんだよ。と言いたかったのだと思う。五日市南中学校の文化としても、とても大切なものですね。以上です。